

関連学会印象記

日本麻酔科学会第48回大会

外 須美夫*

神戸は6年前の大震災からすっかり復興し、街なかにもそのつめ痕を探し出すことは困難に思われた。日本麻酔科学会第48回大会は平成13年4月26日から28日までの3日間、埋め立ててつくられた巨大な人工島の一角にそびえる神戸ポートピアホテルと神戸国際会議場、神戸国際展示場で開催された。神戸大学医学部の尾原秀史先生が会長を務められ「21世紀の麻酔科学会のあり方を考える」という学会テーマを掲げて、これまでと異なる新しい取り組みを幾つか実施し、ひと味違った趣向を感じさせてくれた。

一言でいえば、これまでの慣習を排して簡素化が図られた。1例の症例報告は演題として採択しないことを1年前から公表した。学会での会員懇親会は行わず、座長に対する記念品もやめた。儀礼的なことを止めて、中身を充実させるという主旨であったように思う。インターネットを活用して学会抄録はホームページとE-mailで集めた。全部で1015題の演題が集まったと聞く。神戸という場所柄もあってのことか、学会2日目で4667人の参加者登録が行われた。

1日目の開会の辞に続いて、ウイスコンシン医科大学のBosnjak先生が「Anesthesiology research in 21 century」というタイトルで特別講演を行った。ポストゲノム時代の麻酔領域の研究に関して、将来の展望を熱っぽく語りかけてくれた。昼からの特別講演では世界的な生化学者である西塚泰美、前神戸大学学長が「細胞同士の対話の仕組み」というタイトルで、細胞情報伝達系に関する研究の歴史とPKCを発見した経緯、そして細胞シグナリングのネットワーク異常と各病態との関連などについてお話された。細胞内情報伝達の仕組み

を解明する研究はこれからさらに大きな構図を描いて21世紀に向かって大河をなすであろうと締めくくられた。

今回の学会では、評議員会から総会にかけて、本麻酔科学会が法人化するための手続きがとられ、法人化設立のための議論が活発に行われた。しかし、一般会員の法人化に対する関心はあまり高くなく、「21世紀の麻酔科学会のありかた—法人化によってどのように変わるか」というパネルディスカッションの参加者は2日目の午前中にも関わらず少数であった。また、折角の外国からの著名人による招請講演も、会場が広すぎたせいかもしれないが、聴衆が少なく申し訳なく感じた。一方、ランチョンセミナーやアーリーバードは大入りで盛況だった。まあ、そんなものだろうと思うが、それは単に食事付きというだけに限らないような気もする。ポスターディスカッションでもほとんど聴衆がいないセッションがあった。たとえば、神経セッションのポスター発表は良い内容が多かったのだが、神経麻酔のシンポジウムが同じ時間帯に行われていたためか聴衆が少なく残念であった。

循環系では、シンポジウムで「 $\alpha 2$ アゴニストと麻酔臨床」「麻酔薬の作用点」、学術講演で「高血圧症治療の最近の考え方」、「肺血管作動性の化合物」、教育講演で「周術期の輸液」「吸入麻酔薬と心機能」「人工心肺と血液凝固」「心肺蘇生法の国際ガイドライン」などが取り上げられていた。

私は、東京大学医化学研究所の御子柴克彦先生の学術講演「中枢神経系の発生分化の分子メカニズム」と、大阪大学の高井義美先生の学術講演「神経伝達物質の放出機構」を愉しみにして聴いた。神経研究の最前線をお二人とも情熱的に話された。次々と新しい知見が積み重ねられ、細胞内あ

*北里大学医学部麻酔科

るいは細胞間の複雑な情報ネットワークが解明されていく過程を、研究を先導しているリーダーとしての自信を漲らせて、分かりやすく解説して頂いた。講演を聴きながら、研究を遂行するなかでこのような数々の発見を味わえたら研究者として本望であろうなあと羨ましく思った。と同時に、ゲノム研究から取り残された自分に対する一抹の寂しさと、いや臨床的観点からまだまだこれから

も研究の余地はあるはずだという意地のような希望も抱いていた。

5000人にも上る参加者があったようだが、会場は十分に余裕がありゆったりとしていた。むしろ広すぎて聴衆の割合が少なく感じるぐらいだった。大阪のユニバーサルスタジオ(?)に流れたのではと余計な心配をしてしまうほど、連日晴天に恵まれた学会だった。